

# 07

## 筑波研究学園都市

—— つくば市、茨城県、日本  
1968年～

スマートモビリティに挑戦する日本最大のサイエンスシティ

### Key Issue

筑波研究学園都市は、1970年代に国の試験研究・教育機関を計画的に移転することにより、首都圏への人口の過度集中の緩和を目的として計画された、日本最大のサイエンスシティである。東京都心とコネクした更なる衛星都市を目指して、2005年には東京と直結する都市鉄道「つくばエクスプレス」が開通し、2010年には、東京都心部から高速道路網が改善され、首都圏一体型の開発が進んでいる。一方で、過度な自動車依存、入居者の世代交代や定住が課題となっており、まちの資産を活かした都市再編が求められている。

### Project Approach

#### ペDESTリアンデッキによる都市軸の形成

筑波研究学園都市は、公共空間を活用し、都市の魅力向上やにぎわいの創出を図ることを目的とし、駅・商業施設・大学・まちが、総延長約48kmにも渡って整備されたペDESTリアンデッキで結ばれている。まちの財産であるペDESTリアンデッキを中心に、大学・研究機能に加え、インキュベーション施設等の研究開発支援機能、外国人研究者・留学生等の受け入れ環境の整備、高齢化社会に向けた医療・福祉機能の導入が図られている。

#### オープンキャンパスの形成

都市軸であるペDESTリアンデッキは、大学キャンパスを貫通しており、キャンパスの中心軸になっている。大学計画も、“キャンパスを常に地域住民に開放しておくために、その周辺に門扉の類を一切設けないという方針がとられた。(中略)こうしたオープンキャンパスのづくりは、学生が周辺の市街地に出て行きやすくするうえでも効果を発揮している”。(土肥博至「大学都市への模索」建築雑誌No.1353、Feb. 1994)



都市軸であるペDESTリアンデッキは、キャンパスを貫通し、都市と大学を結び、大学都市の象徴になっている。



筑波大学、民間企業、行政が連携して、社会課題解決と地域経済振興を目的とした、次世代モビリティ基盤の形成に向けた取組みを推進している。  
出典：筑波大学 未来社会工学開発研究センター

#### Data

面積	28,400ha (研究学園都地区2,700ha、周辺開発地区25,700ha)
事業主体	UR 都市機構、茨城県 ほか
事業手法	土地区画整理事業
計画人口	研究学園都地区10万人、周辺開発地区25万人
主な導入施設	筑波大学、産業技術総合研究所、高エネルギー加速器研究機構等の研究機関、つくばエクスプレス、圏央道つくば中央など



### To the Next Phase

過度な自動車交通への依存からの脱却に向けて、スマートモビリティ社会の実現を目指す次世代モビリティ基盤「つくばモデル」の構築が進められている。本事業で、バス乗降時の顔認証によるキャッシュレス決済等の実証実験や、AI活用による人流予測を行う。アプリによる移動実態調査や、乗車待機時間を最小化するバス運行の最適化支援システムの設計などが検討されている。交通事故ゼロ、渋滞解消等の自動車の技術革新だけでなく、医療・地域ケア等の新たな社会サービスと雇用の創出を目指している。